予感

根来 澪子

「予感」とか、「霊感」とか、世の中には超自然現象を体感する能力があると信じている人達がいる。――やっぱりあの時――など、「正夢」というのもあるらしく、夢枕に立った人の言うことを、現実のように「感じる」人もいる。特に女性の好きな話題だが、能力というより、かくありたいという願望が、幻覚と入り乱れ、先天的に備わった霊力のように、認知されているのだろうと私は思っている。

私はいまだかって、残念ながら霊感も奇跡も体験したことが一度もない。明け方に見た夢を、目覚めた後も脳がありありと記憶していて、もしかしてその一断片でも現実に起こるのではと期待したこともあったが、何時も空振りに終わった。夢は荒唐無稽な絵空事でしかなかった。愛する娘が、アメリカの地で日本時間の真夜中、1時半に臨終を迎えた時も、私はいつもと同じように寝入っていて、何らの予兆も感じなかった。今わの際（きわ）にせめて雨戸をたたくなり、メッセージを送ってくれてもいいのに、私がそれを知ったのは夜が明けて朝の8時、アメリカの家族からの電話であり、私にはその「魔」の時間に「予感」も「霊感」ももたらせることなく、娘の魂は母のもとに帰ってこなかったのである。

２０２２年の年明け、超高齢の身には、うれしいことなどあろう筈がない元日である。「なんとなく今年はよいことあるごとし　元日の朝晴れて風無し」と啄木は詠ったが、そして今年も元日の朝、晴れて風なし」なのだが、これ以上事態が悪化せず、昨日と同じような平凡であればありがたいと思っている。周囲の友人知人が大挙してあの世に引っ越していき、私の順番がやってくるのを待っているのが現状である。年賀状もお互い、中止の状態なので、成すこともない朝を迎え、憮然として、それでもポストを覗くと、何枚かの賀状があった。さて、だれからのものだろうと確かめたら、業者の宣伝のはがきなどに交じって、かって、賀状を交換していたＭさんからのものがあった。

Ｍさんは私が２０年以上もまえに加入していた、近隣の都市のサークルの友人である。当時私は７０歳だったが、それでも年少であるほどの高齢のサークルだった。十四五人ほどの会員数だったと思うが、男性のほうが多かった。

私より3歳ほど年長のMさんはそのサークルの会長であった。現役時代は市内にある有名なリハビリ病院の婦長（当時はそういった）で、何百人の看護婦を束ねる重要なポストに長く在職した人であった。サークルは文章を書く会で、彼女の作品が特に優れているとは思えなかったが、その統率力、会の運営の仕方などバリバリのキャリアウーマンで、会長にふさわしい人格の持ち主だといつも尊敬していた。一緒に会に在籍したのは10年間近かったと思う。特に親しいわけではかなったが、（彼女は強いて個人的に親しい友人を作らなかったと思う）同じ会員として長いお付き合いがあった。

しかし、会員全員がさらに高齢化して運営が難しくなり、6、7年ほど前に解散した。離れ離れになるのは寂しいことだったが、ほとんどが80代も半ばを過ぎるとエネルギーが枯渇してしまい、「書く」という行為もおっくうになり、残念ながら解散せざるを得なくなり、解散式も行った。私達はそれぞれ、個人的な付き合いに移り、住んでいる場所が遠いということもあって、Mさんとの交流は途絶えた。Mさんは特に詩吟が得意で、溢れるようなバイタリティーで活躍しているようだったし、どこに行っても行動的な指導力で会員の上に立つ人であった。

数年か、それ以上途絶えていた賀状が、突然2022年の今年に送られてきた。印刷された年頭のあいさつのあとに、直筆で「私は元気です」と書いてある。とても驚いたが、久し振りのお便りで私を思い出してくださったことがうれしくなり、さっそく返事を書いた。

「今は大寒の時期だし、コロナが治まる（であろう）4月ごろになったら、ぜひお会いしたい」といったような文面だった。十数年も前のサークルのあれこれなど思い出しながら気分は和らいでいた。

しかし一月末、驚くようなお葉書を彼女のご子息から頂いた。

「母、〇〇儀、さる1月13日、急性心筋梗塞のため、満91歳で永眠しました。」そして家族葬を行ったこと、香典、供花は故人の遺志により拝辞させていただきます」という文面であった。

私が賀状を頂いてから、2週間もしないうちに彼女はこの世を去っていったのだ。慌てて、会の解散後もメールなどで近況を知らせあっている友人のTさんに連絡を取った。Tさんは現在も市の体育館でMさんとストレッチ体操を一緒にやっているとのことなので詳

しい情報を聞くことができた。Tさんは、Mさんが亡くなる前日にも、いつものようにストレッチ体操をやり、終了後、ありふれた雑談を交わしたという。普段の様子と全く変わらず、「まさか」、の思いでとても信じられないと話してくれた。

「ピンピンコロリ」とよく我々高齢者は口にする。誰もが願うところだが、人生の最大の不条理は、自分の死のありようを自分で選択することができないことである。

不慮の事故かも知れないし、癌やら、心不全、基礎疾患の悪化、など、死にざまは多様で「ピンピンコロリ」はどんなに努力しても「神のみぞ知る」の領域である。不本意ながら、長患いで周りに迷惑をかけるかもしれない。高齢者は一番おそれていることである。それが彼女には恩寵のように訪れた。まさに「神に選ばれた死に方」だ。９１歳という年齢も天寿を全うしたといえるだろう。私はいただいたはがきに黙礼して、しばしMさんの想い出に浸り、偲んだ。

　それにしてもMさんは何故今年になって、思い出したように突然年賀状を呉れたのだろう。深い意味はないのかもしれない。たまたま、昔取り交わした賀状のなかに私の古い賀状が紛れ込んでいて、無意識に書いたのかもしれない。

　しかし私は思いたい。Mさんには何らかの「予感」が働いて、私を思い出し、便りをくれたのだと。彼女の心の片隅には無意識であったかもしれないが、私が住み続けていたのだと。

（２０２２年　２月）